

## 第 15 回有機結晶シンポジウム報告

日本化学会有機結晶部会（部会長 小倉克之教授（千葉大工）、会員数約 300 名）では毎年秋にシンポジウムを開催しています。今年は第 15 回になりますが、『進化する有機固体化学：構造、物性、機能、反応、動的分子挙動など』を討論主題として、愛媛大学大学院 理工学研究科の小島秀子教授（A04 班）のお世話をいただき、2006 年 11 月 24 日（金）25 日（土）の両日、愛媛大学総合情報メディアセンターを会場として開催されました。愛媛大学は松山市内の便利な場所にあり、中心街や松山城、道後温泉も徒歩圏内です。会場のメディアセンターは新しい建物で、会場設備も申し分ありませんでした。

参加人数は約 120 名との発表があり、地方開催ではありましたが大変盛況でした。特筆すべきはその半数（約 60 名）が学生だったことで、熱気あふれる発表や質疑応答がありました。また、少数ながら企業からの参加も頂き、有機結晶分野の広がりが感じられました。

例年通り、多様な分野の招待講演が行われ、今年はオーストラリアから、Roger Bishop 教授（University of New South Wales, Sydney）も来訪されました。Bishop 教授は有機結晶分野（Crystal Engineering）の大家で、Pacifichem2005 でも有機結晶部門のシンポジウムを主催され部会にはなじみの先生です。

四件の招待講演のタイトルは次のようなものでした。

- 「Supramolecular Chemistry of Heteroaromatic Inclusion Hosts」 Roger Bishop (University of South Wales, Australia)
- 「巨大分子（タンパク質）でみる結晶の成長素過程」佐崎 元（東北大金材研）
- 「Generalized High Accuracy Universal Polarimeter のナノ材料への応用」朝日透（早大先端科学・健康医療融合研究機構）
- 「テトラチアペンタレン系分子性導体における構造-導電特性相関」御崎 洋二（愛媛大院理工）

また、口頭発表（20 分）は 25 件、ポスター発表が 48 件あり、両日とも朝 9 時から夕方 5 時過ぎまで密度の濃いシンポジウム発表が行われました。発表では、有機結晶の物性（伝導性、発光、ホトクロミズムなど）、キラリティ、結晶構造、結晶相反応、包接化合物、結晶成長、ナノ材料などが主なキーワードでした。今年は物性に焦点を当てた発表が多かった印象がありました。多くの発表が三次元の分子構造や結晶構造を挙げて物性の説明をしていたのが印象的でした。シンポジウム発表らしく、十分に質疑応答の時間もとられており、内容ある質問やアドバイスが多数寄せられていました。

ポスター発表については、2 分間のオーラルプレビューの時間が設けられ、ポスター発表者もスライドを数枚使って研究の要点を説明する機会があります。時間がとられるためか国内では採用例が多くないようですが、ポスター発表の要点が把握でき、ポスター時間内の議論の密度が濃くなる利点があると感じています。ポスター発表の学生さんからは、

「ぜひ見に来てください！」という頼もしい発言も聞かれました。

有機結晶部会シンポジウムは次回（第 16 回）坂本昌巳教授（千葉大工学部）のお世話をいただき、千葉大学で 2007 年 9 月に開催予定です。興味をお持ちの方は、ぜひご参加いただければと思います。有機結晶部会の情報は、部会ホームページ <http://occ.chemistry.or.jp/> に掲載されます。今回のシンポジウムの情報については、プログラムだけでなく、予稿も掲載されており皆様にご覧いただけます。また、日本化学会の会員の皆様には有機結晶デイビジョンからも情報を提供しています。

なお、日本化学会有機結晶部会に入会していただければ、部会誌「有機結晶ニュースレター」（最新号は第 19 号）を春秋二冊お送りし、シンポジウムを含む部会活動のご案内も致します。ご興味のある方は日本化学会会員部までご連絡ください。有機結晶部会のご紹介は、2006 年 4 月号の「化学と工業」（日本化学会会員誌）に「部会だより」として掲載されております（A04 班 松本章一教授，（大阪市立大学）；化学と工業，59(4)，pp.491-492 (2006)）。



会場風景（口頭発表）



ポスター発表風景